目白大学　健康科学研究
第11号　2018年　17－23

さいたま市岩槻区のまちづくりに関する住民のニーズ調査

野村健太　石井薫　白石めぐみ　広江祐司　今井満悠子
小林祐子　齋藤ちひろ　會田玉美
（Kenta NOMURA　Kaoru ISHII　Megumi SHIRAISHI　Yuji HIROE　Mayuko IMAI
Yuko KOBAYASHI　Chihiro SAITO　Tamami AIDA）

【要約】

《目的》本研究の目的は目白大学のあるさいたま市岩槻区のまちづくりについて、住民のニーズを明らかにし、目白大学が地域課題の解決に寄与するための糸口を見出すことである。

《方法》岩槻区のまちづくりに携わっている柏崎地区社会福祉協議会役員を対象に、岩槻区の課題として住民から声が上がっていることや、岩槻区の住民の希望などについて無記名のアンケート調査を行った。自由記載での回答は質的内容分析、選択肢の回答は単純集計を行った。

《結果》有効回答は17部、回答率は32％であった。岩槻区の地域課題は、高齢者だけでなく子供・若者も含めて交流するための充実したサロン活動を増やし、それを継続することであった。

《結論》目白大学の敷地や設備、教員の専門的な知識や学生の力等の資源を活かし、新たなサロン活動を実施することで住民のニーズに応えられると考えられる。今後、住民の主体性を引き出し、効果的なサロン活動を行うために、自治体や住民との有機的な連携を強める必要があると考えられる。

キーワード：まちづくり、ニーズ調査、アンケート

Ⅰ．はじめに

厚生労働省[1]によると、我が国は今後、単身世帯が増加し、支援を必要とする高齢者が増加することから、ボランティアやNPO、民間企業、協同組合等の多様な主体が生活支援・介護予防サービスを提供することが必要であるとされている。地域包括ケアシステムの構築を目指す中で、生活支援・介護予防サービスは高齢者個々のニーズに合った多様なサービスを用意する必要がある。そのような中、埼玉県は2010年から2025年までの間で75歳以上の後期高齢者の増加率が全国の中で最も高く、後期高齢者人口（75歳以上）に占める生産年齢人口（15～64歳）の比率が最も減少する[2]と推計されている。目白大学（以下、本学）岩槻キャンパスのある岩槻区はさいたま市の東に位置し、さいたま市で最も面積の大きい区である[3]。2017年現在の岩槻区の人口は約11万人で高齢化率はさいたま市10区のうち最も高い29.3％である[4]。今後も高齢化が進むことが推定されている[5]。つまり、岩槻区は全国で最も高齢者人口が増加する県の中の高齢化が激しい区であり、高齢者が地域で暮らし続けるための多様なサービスの充実が急務である。同時に、サービスを必要とする人に適切なサービスを届けるために、支援者同士および住民をも巻き込んだ新たなネットワ

のむらけんた：目白大学保健医療学部作業療法学科
いしいかおる：IMS板橋リハビリテーション病院
しらいしめぐみ：慈誠会練馬駅リハビリテーション病院
ひろえゆうじ：IMSグループ板橋中央総合病院
いまいまゆこ：慈誠会徳丸リハビリテーション病院
こばやしゆうこ：蓮田よつば病院
さいとうちひろ：手賀沼病院
あいだたまみ：目白大学大学院リハビリテーション学研究科

ークづくりが必要である。

本学は平成６年に開学し、平成14年に理学療法学科と作業療法学科を有する保健医療学部が設立された。作業療法学科では、岩槻区の祭りや老人保健施設などで学生がボランティアとして参加するなど、継続的に交流してきた。その中で、交通の便が悪いことや世代間交流の少なさなど、岩槻区が直面する課題について住民から様々な意見を聞くことはあったが、それらの課題の解決のために継続的に協働したことはなかった。全国には住民のニーズを把握し、地域課題の解決に取り組んだ実践例がある。例えば埼玉県立大学[6]では、高齢者の学習の場である彩の国いきがい大学の高齢者が、看護学生に高齢者の考え方や暮らしの実態について講義を行い、社会参加、社会貢献の機会をつくっている。また、私立大学である松本大学[7]では、ひとづくり、まちづくり、健康づくりの３つのカテゴリーに地域課題を分け、地域連携戦略委員会を設け、多様な活動を行っている。中でも、健康づくりに当たる地域健康支援ステーションでは、社会福祉協議会の依頼を受け高齢者いきいき交流会で介護予防講座を実施したり、公民館の健康づくり事業の一環として高齢者対象の料理教室を開いたりしている。岩槻区は、第５期岩槻区区民会議平成25年度提言書[8]の中で、「思いやりのある地域密着型のまちづくり」というテーマを掲げ、多世代交流の担い手づくりと多世代交流の場を作ることを提言としてまとめており、多世代が集える場所作りや防犯活動、清掃活動などが行われている。この提言に則り、今後の人口変動を鑑みた上で地域課題、特に高齢化に伴う問題の解決に向けた取り組みが岩槻区の各地で行われる必要があると考えられる。本学も高齢者や地域福祉に関する知や人的資源を活用することで、岩槻区の地域課題の解決に寄与できると思われる。そのためにも、まず住民のニーズを明らかにし、具体的な取り組みを計画する必要がある。本研究の目的はさいたま市岩槻区のまちづくりについて住民のニーズを明らかにし、本学が地域課題の解決に寄与するための糸口を見出すことである。

Ⅱ．方　法

１．対象

対象は平成26年度柏崎地区社会福祉協議会役員53名とした。岩槻区の柏崎地区は東武アーバンパークライン岩槻駅から車で15分ほどの位置にあり、公共交通機関は民間の会社が運営するバスのみである。柏崎地区社会福祉協議会は柏崎地区だけでなく岩槻区全体のまちづくりについても議論している団体である。また、本学は柏崎地区内に位置し、柏崎地区社会福祉協議会とは作業療法学科客観的臨床能力試験（Objective Structured Clinical Examination；OSCE）の模擬患者役を毎年依頼しており日ごろから相互交流を図っている。よって岩槻区の住民のニーズおよび本学とのかかわりが深いと考えられ、本研究の対象とした。

２．調査方法

調査方法は無記名式のアンケート調査とした。開学時から柏崎地区社会福祉協議会と交流のあった本学教員の紹介により、筆頭筆者が柏崎地区社会福祉協議会役員会で研究の詳細を説明し、承諾を得た後、柏崎地区社会福祉協議会の事務局に調査票の郵送を依頼した。筆頭筆者は役員会に出席した柏崎地区社会福祉協議会役員12名と研究依頼の際に初めて会ったという関係性である。調査項目は岩槻区の課題として住民から声が上がっていることや、住民の希望、必要な施設や設備まちづくりに関して難しいと感じていること、今後行いたい活動、地域における本学のイメージを自由記載で回答を求めた（表１）。興味のある講座やワークショップのテーマは選択肢による複数回答とした。調査期間は平成26年２月から３月とした。

３．分析方法

分析方法は、自由記載については質的内容分析[9]を行った。分析の手順は、記載内容を繰り返し読み、１つの回答の中でまとまりのある文脈が２つ以上ある場合はデータを分けた。次に回答の中の注目すべき語句を抽出し、内容の類似性によって分類しラベルを付けた。この分析は筆頭筆者が一人で行った後、質的研究の経験のある共同研究者１名およびその他の共同研究者で分析の妥当性を検討し、さらに修正した。基本属性と選択肢での回答は単純集計を行った。

Ⅲ．結　果

有効回答は17部、回答率は32％であった。回答者の年齢は50歳代が２名、60歳代が７名、70歳代が７名、80歳代が１名であった（図１）。回答者の性別は

男性６名、女性11名であった。社会福祉協議会役員経験年数は７～８年が６名と最も多く、次いで５～６年と９～10年が４名ずつ、その他が３名だった（図２）。委員・役員の経験歴はボランティア、PTA、声掛け運動の委員などであった（表２）。自由記載で回答する項目は合計4974字、平均829字、１名あたり49字の回答が得られた。質的内容分析を行った結果、全部で32のラベルが分類された。質問ごとに回答数の多い上位３ラベルを表３に示した。また、ラベル名を文中に［　］の記号で示した。

岩槻区の課題として住民からよく声が上がっていることは、［減少する子・若者と増加する高齢者］と［交通の不便さ］が最も多くの回答があり、次いで［地域内のコミュニケーション］、［運動ができる公園の不足］、［自治会員の減少］、［スーパーマーケットの不足］、［岩槻の産業］であった。将来の地域の方向性に関する住民の希望は［子供・若者にとっても良い街］に分類される回答が最も多く、次いで［顔を合わせ、声をかける地域］、［集う場所］、［安心・安全］、［活気・活動的な街］、［街おこし］、［助けあう地域］、［病院］であった。ほしい施設や設備のラベルは［人が交流する場所］、［公園］、［医療・福祉施設］、［趣味活動］であった。社会福祉協議会役員会としてまちづくりで難しいと感じていることは［継続的で充実したサロン活動］に分類される回答が最も多く、次いで［高齢者や認知症の方の見守り］、［自治会］、［老化による活動性の低下］、［外出の手段］であった。今後行いたい活動は［サロン・交流］に分類される回答が最

表１　調査項目

No	調査項目	回答方法
1	基本属性	
	年齢，性別，回答者の性別	選択
	社会福祉協議会役員経験年数，委員・役員の経験歴	自由記述
2	岩槻区の課題として住民からよく声が上がっていること	自由記述
3	将来の地域の方向性に関する住民の希望	自由記述
4	必要な施設や設備	自由記述
5	社会福祉協議会役員としてまちづくりで難しいと感じていること	自由記述
6	今後行いたい活動	自由記述
7	興味のある講座やワークショップのテーマ	選択
	選択肢：交流，健康，運動，遊び，教育，その他（複数回答可）	
8	地域における本学のイメージ	自由記述

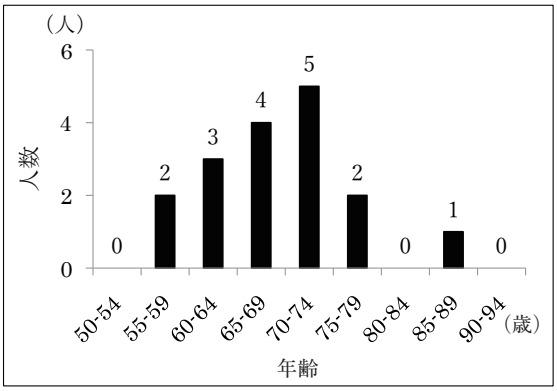

図１　対象者の年齢

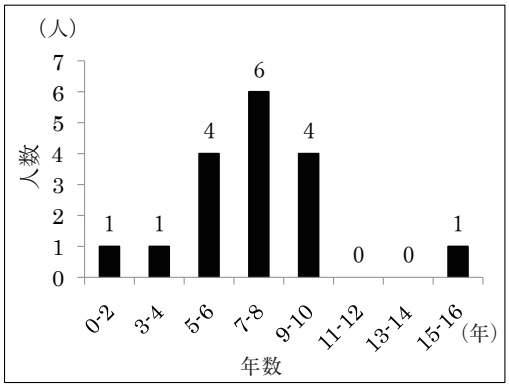

図２　社会福祉協議会役員経験年数

表２　委員・役員の経験歴

小学校読み聞かせボランティア	PTA小学校学年委員
クリーンさいたま推進委員	小学校　安全委員会
交通誘導員	校門前声かけ運動委員
小学校PTA	ロータリークラブ
中学校PTA	目白大学ローターアクトクラブスポンサークラブ

表３　自由記載での回答項目の結果（多数上位３ラベルのみ抜粋）

項目	ラベル	回答例
②岩槻区の課題として住民からよく声が上がっていること	減少する子・若者と増加する高齢者	子供と家族が同居しない（子供が地域から出て行く）、高齢者の心配事（医療施設の充実と情報提供）、高齢者と若者が交流できる場を設けて欲しい高齢者世帯の増加
	交通の不便さ	地域が広いので交通の便が悪い地下鉄延伸の遅れ、コミュニティバス路線の増設（公共交通の設備）、歩車道の分離（安心して歩ける道路）
	地域内のコミュニケーション	今後の集合住宅やマンション等の増加による住人とのコミュニケーション不足近所の人との関わりが少ない、岩槻の地の人以外はよそ者として扱う街中に日中人が出ていない、賑やかさがない
③将来の地域の方向性に関する住民の希望	子供・若者にとっても良い街	成人した子供が、他場所に生活の場を設けてほしい。実家に帰って来ない人たちが多い。このため、一人暮らしや高齢者のみの世帯が年々増えている。子供が安全に遊べる地域になってほしい 子供達が遊んでいたら、大人達が見守りを出来る地域でありたい
	顔を合わせ、声をかける地域	１日に１回は近所の人とあいさつや声かけをお互いにする 皆で声をかけ合える街、顔の見える地域 自分の身近にどんな人が住んでいるのか知りたい 誰が住んでいるのかわからないというような孤立がないように
	集う場所	高齢者が集う場所がもっとあれば 地域の人たちの集える場、運動・コミュニティー等の出来る多目的な施設 地域住民及び他の地域の住民の皆様方との交流の場を持つ
④ほしい施設や設備	人が交流する場所	自治会を横断的に包含する集会所があれば良い その地区の子供と高齢者が集まれる公民館の様な物 コミュニティカフェ（集いの場所） 誰でも気楽に休憩出来る場所
	公園	各自治会度にみんなが集いやすい公園、年寄りから子供まで 軽い運動ができるアスレチックを備えた公園 歩いて10分以内に小さくても良いから公園がほしい
	医療・福祉施設	救急病院、リハビリ施設 高齢者向け健康増進センター ヘルシーロード（車の通らないウォーク専用道路）の増設
⑤社会福祉協議会役員会としてまちづくりで難しいと感じていること	継続的で充実したサロン活動	ふれあいサロンの充実（参加者が少ない） 一人一人の持っている良い点を地域の出してほしい。 昔の婦人会のように自発的に地域の方が起こすサロン そのサロンの経費の捻出方法等の検討が必要
	高齢者や認知症の方の見守り	認知症予備軍が多くなっていると思う。日常の行動をみてもらうのが大事 高齢者の見守りを積極的に行いたいが、あまり頻繁に伺うと不快な気にさせてしまいそうで、頻度が難しい 横の連携が出来ればもっと良い活動が出来ると思う
	自治会	各種行事に対して参加される方は毎回参加されますが、関心のない方は全く知らぬ顔である。どうすれば同じ方向を向いてくれるか課題 役員の硬直化 自治会の役員さんとの関係。行事を計画しても協力がえられない
⑥今後行いたい活動	サロン・交流	地域のたまり場的な施設づくり 気軽に集えるサロン 地域交流イベントの開催 赤ちゃんのいるお母さんと赤ちゃんが集まって茶話会などしてみたいです
	趣味活動	高齢の方による料理教室など 美味しい野菜のつくり方など 生きがいを見出す方法として高齢者の方々へ楽しい遊び方教室（料理教室等も） 今月初めて体操教室を開いた。毎月のように開催できればいい
	介護予防	家に閉じこもらずに、健康体操等、高齢者企画 健康増進教室、介護予防 優しい運動教室（例：ラジオ体操）
⑧目白大学のイメージ	地域交流への期待	活発な地域になっていくのではないかと期待 目白大学祭が地域の人たちとの交流があり喜ばしいです ボランティア精神が根づいていて、地域に貢献されているイメージがある 地域ふれあいサロンにも出向いてくれる頼りになる大学 勉強してみたいな…と思われている方には良い学舎です
	良い学生・若者	校内に入ると学生さんたちが挨拶をしてくれる 文化祭での車誘導等、自分の役目を行っているのが立派でした 若者の集合体と思う
	肯定的なイメージの大学	明るい学園 親しみが持てる大学 これから更に発展する大学

も多く、次いで［趣味活動］、［介護予防］、［見守り活動］、［認知症対策］であった。本学のイメージは［地域交流への期待］に分類される回答が最も多く、次いで［良い学生・若者］、［肯定的なイメージの大学］、［地域とのつながりにおける課題］、［本学クリニックが良い］であった。興味のある講座やワークショップのテーマは「交流」が16名で最も多く回答され、次いで「健康」が14名、「運動」が７名であった（図３）。

Ⅳ. 考　察

本研究の対象者は柏崎地区社会福祉協議会役員をしているだけでなく、PTA、小・中学校の安全委員など、地域で活発な活動をしている高齢者が中心の集団である。よって本研究は高齢者のニーズが強く反映されていると考えられる。

岩槻区のまちづくりに関するアンケートを実施した結果、自由記載での回答項目の全体を通して地域交流を意味するラベルである［減少する子・若者と増加する高齢者］［地域内のコミュニケーション］［顔を合わせ、声をかける地域］［集う場所］［人が交流する場所］［継続的で充実したサロン活動］［サロン・交流］が分類された。また、質問７の興味のある講座やワークショップのテーマでも、「交流」が最も多かった。岩槻区には地域交流を図るサロン活動が多く、岩槻区役所の掲示板にその案内が掲示されている。しかし、近所の人との挨拶を始めとする［地域内のコミュニケーション］の減少や、［交通の不便さ］［運動ができる公園の不足］などの理由により、現存するサロン活動では住民のニーズに十分応えられているとは言い難い。そこで、質問８の地域における本学のイメージで［地域交流への期待］を持たれていることもあり、本学の敷地や設備、教員の専門的知識、学生の力も含めた資源を活用し、新たなサロン活動を実施することによりニーズに応えることができると考えられる。高齢者の地域における新たなリハビリテーションの在り方検討会[10]によると、「医療機関や介護サービス事業所等が、地域の他産業や活動の中に、高齢者の生活を支え、参加の場を提供する社会資源を見いだし、あるいは創出、発掘をしていくことも必要である」と述べている。また、内閣府経済社会総合研究所[11]によると、「地域を担う住民と、地域内外からそれを支える人々、その両方の人材育成に大学が積極的な役割を果たす必要がある（中略）、地域内外から地域の住民を支援するプレーヤーとしても大学には大きな役割を期待される」とされていることからも、本学の資源をサロンに活用することが社会的に意義のあることであると考えられる。また、山下ら[12]は、「高齢者サロンの課題は、介護予防効果が期待できるプログラム内容の充実強化、住民主体の運営の促進、サロン活動を通した地域活動の促進」が必要であると述べていることから、［継続的で充実したサロン活動］にするためには、住民の主体性を引き出す必要がある。さらに、安齋ら[13]は、住民主体の活動を定着させるために専門家や行政の継続的なサポートが必要であると述べている。サロン活動の企画・運営は本学だけでなく、自治会や地域包括支援センターなどと連携し、広報や効果的な運営のために協議しながら進める必要があると考えられる。本学では、平成28年度より地域連携研究・推進センターを設け、介護予防事業やボランティア活動を積極的に行っている。また、さいたま市と包括連携協定を結び、自治体と協働して地域課題の解決に取り組む体制を整えている。

本研究は岩槻区のなかでも柏崎地区という限られた地域の社会福祉協議会役員17名のデータであること

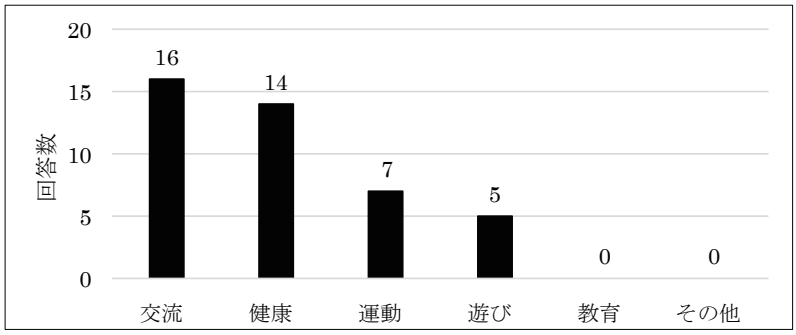

図３　興味のある講座やワークショップのテーマ（複数回答可）

や、回収率が低いため、拾いきれていないニーズがある可能性がある。また、自由記述では書ききれない潜在的なニーズもある可能性がある。今後は、岩槻区全体の住民のニーズを詳細に調査し、自治体や住民と連携して具体的なサロン活動の内容を考案する必要がある。

V．結　論

岩槻区の地域課題は、高齢者だけでなく子供・若者も含めて交流するための充実したサロン活動を増やし、それを継続することだった。そのニーズに対し、本学への期待もあり、本学の敷地や設備、教員の専門的な知識や学生の力等の資源を活かし、新たなサロン活動を実施することで住民のニーズに応えられると考えられる。今後、住民の主体性を引き出し、効果的なサロン活動を行うために、自治体や住民との有機的な連携を強める必要があると考えられる。

本研究は、目白大学作業療法研究会の活動の一環として実施した。

【文献】

1）厚生労働省：介護予防・日常生活支援総合事業の推進に向けて．6（2015）．http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/0000088323.pptx（2017年8月27日検索）
2）老健局総務課：都市部の高齢化対策に関する検討会報告書参考資料．4（2013）．http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12301000-Roukenkyoku-Soumuka/0000024458.pdf（2017年6月4日検索）
3）さいたま市 都市戦略本部／都市経営戦略部：市の概要．http://www.city.saitama.jp/006/012/001/007/p006217.html（2017年6月16日検索）
4）埼玉県 総務部統計課：平成29年埼玉県町（丁）字別人口調査．（2017）．http://www.pref.saitama.lg.jp/a0206/a009/documents/hyou1-1_3kubun29.xls（2017年9月20日検索）
5）さいたま市：岩槻区の人口について．4（2017）．http://www.city.saitama.jp/iwatsuki/001/002/009/p046850_d/fil/H29-3-31.pdf（2017年10月5日検索）
6）埼玉県立大学：彩の国いきがい大学の高齢者が県立大学の看護学生に講義をします．http://www.spu.ac.jp/view.rbz?cd=848（2017年9月18日検索）
7）松本大学：地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（大学COC事業）．http://www.matsumoto-u.ac.jp/coc/（2017年11月15日検索）
8）岩槻区区民会議：第5期岩槻区区民会議 平成25年度提言『思いやりのある地域密着型のまちづくり』に向けて．6−11（2014）．http://www.city.saitama.jp/iwatsuki/001/002/004/p022845_d/fil/teigen.pdf（2017年9月29日検索）
9）ウヴェ・フリック（著），小田博志（翻訳）：質的研究入門―“人間の科学”のための方法論．春秋社 393−400（2011）
10）高齢者の地域における新たなリハビリテーションの在り方検討会：高齢者の地域における新たなリハビリテーションの在り方検討会報告書．46-47（2015）．http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12301000-Roukenkyoku-Soumuka/0000081900.pdf（2017年9月18日検索）
11）内閣府　経済社会総合研究所：研究会報告書等 No.74 大学等の知と人材を活用した持続可能な地方の創生に関する研究会報告書．22−23（2016）．http://www.esri.go.jp/jp/prj/hou/hou074/hou74.pdf（2017年9月18日検索）
12）山下清香，尾形由起子，小野順子，手島聖子，楢橋明子，迫山博美：地域の介護予防活動の推進における保健師の役割について―高齢者サロンの世話役及び指導員の認識から―．福岡県立大学看護学研究紀要　13，35−49（2016）
13）安齋紗保理，佐藤美由紀，齊藤恭平，芳賀博：地域在住高齢者・行政・研究者の協働により創出された地域活動が自主化に至るまでのプロセスとその効果～アクションリサーチを用いた取り組み～．応用老年学　9，4−18（2015）

（2017年10月6日受付、2017年12月4日受理）

Community planning-related needs for residents of Iwatsuki-ku, Saitama-shi

Kenta NOMURA[1], Kaoru ISHII[2], Megumi SHIRAISHI[3], Yuji HIROE[4]
Mayuko IMAI[5], Yuko KOBAYASHI[6], Chihiro SAITO[7], Tamami AIDA[1)8)]

【Abstract】

Objective: The purpose of this study was to clarify the community planning-related needs for the residents of Iwatsuki-ku, Saitama-shi, where Mejiro University is located.

Methods: The officers in Social Welfare Council participated in the community planning of Iwatsuki-ku. A questionnaire method was employed, The opinions and problems concerning community planning for the residents of Iwatsuki-ku were gathered using a questionnaire. The analysis method was simple tabulation and classified free writing through qualitative content analysis.

Results: Seventeen questionnaires (32%) were returned. The main issue in Iwatsuki-ku was the lack of sufficient places where the elderly could interact with each other as well as with youths; the residents also expected facilities such as a community salon.

Conclusions: Problems were addressed using resources such as places, people, and knowledge of the Mejiro University as a community salon for people of the community. However, strengthening the cooperation among residents and local government on how to run a community salon is essential.

Keywords：community planning, needs, questionnaire

1）Department of Occupational Therapy, Faculty of Health Science, Mejiro University
2）IMS Itabashi Rehabilitation Hospital
3）Jiseikai Nerima station Rehabilitation Hospital
4）IMS Itabashi chuo medical center
5）Jiseikai Tokumaru Rehabilitation Hospital
6）Medical corporation kokorono kizuna HASUDA YOTUBA hospital
7）Teganuma Hospitai
8）Graduate school of Rehabilitation, Mejiro University